日本の里山

里山の成立ち、資源循環と暮らし

日時：平成２０年９月７日（日）　１０：００～１５：００

講師：岩槻　邦男（兵庫県人と自然の博物館館長）

概況

里山に見る人と自然の共生

■里山の定義・特性

里山とは何だろうか。広辞苑では「人里近くにあって、その土地に住んでいる人の暮らしと密接に結びついている山・森林」とされているが、普遍的な定義は困難である。なぜなら「里山」は、そもそも人の生活の中から自然発生的にできあがった景観・環境であり、例えば、東北と関西で指す「里山」には異なったところもあり、地域ごとにも多種多様である。

■人と自然の共生　－日本人の自然観－

人と自然の共生という考え方について、日本人は感覚的に理解できる。一方で欧米人には、元々そのような概念がなく理解が難しい。日本人にとって自然は、豊かな資源に感謝し、頻出する災害を畏れるというものだが、欧米で「nature」は「wild」でdemon の住処であり、文明によって「clear」するもの、すなわち資源を利用し人に役立てるものである。

日本人の自然への畏敬は奥山を保全するかたちで護られてきた。ご先祖は、森林を伐採し農地を開発したときには、そこに氏神を祀り、奥山の依り代鎮守の杜を八百万の神の住処として維持してきた。このような持続的な開発の結果、室町時代・江戸時代には人里、里山、奥山ときれいなゾーニングが確立されたのである。また、「もったいない」という言葉があるが、勿体とは「実体」を指し、神様からもらったものであり、

それを無駄にすることは神様に対する冒涜であるという日本人の考え方が顕著に現れている言葉である。このように日本には、自然そのものを畏敬する心があり、その結果として伝統的に人と自然の共生についての考え方が培われていた。

一方で、明治以降は西欧文明に追いつけ追い越せで、物質エネルギー志向の近代文明の時代に入り、日本人のライフスタイルが変化し、生活の中から自然と向き合っていくものの見方が失われてきた。そのような流れの中で、里山の放棄、里山の荒廃が起こっている。地球の持続性を考えるとき、前述したような日本がこれまで伝統的に持っていた経験や考え方に立ち戻って、人と自然の共生を維持する自分のライフスタイルを取り戻し、世界に発信していくことが求められている。